

# 成果報告書

湘南藤沢学会 「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」

総合政策学部（教授） 堀 茂樹

## 1. 集会名称あるいは活動の名称と概要

<名称>

現代社会文化論シンポジウム：

《日本の「世間」とメディアを考える 思考停止を突破するために》

<主催>

現代社会文化論プロジェクト(慶應義塾大学政策・メディア研究科)

<日時・会場>

2010年07月23日(金)、17時00分～20時00分

於：慶應義塾大学三田キャンパス、北館ホール

<概要>

日本のマスメディアの特徴が如実に現れたと思われる昨今の事件報道の具体的事案を取り上げ、メディアの取材・報道姿勢の背後に横たわる構造的問題、受容する視聴者や日本社会の側のメディア・リテラシー等について、メディア関係者・専門家と学生が講演、発表、そして共同討議を通して、現代日本に求められるジャーナリズムの姿について考えた。その際、日本社会（とそのサブシステムであるメディア）を読み解くキーワードとして「世間」を置き、分析の手段とした。

## 2. 参加者

<パネリスト>

森達也氏（映画監督、ノンフィクション作家）

篠田博之氏（月刊『創』編集長、ジャーナリスト）

田島泰彦氏（上智大学文学部新聞学科教授、情報メディア法）

（司会）堀 茂樹（慶應義塾大学総合政策学部教授、フランス思想史）

<発表者>

総合政策学部4年 芹澤 学

総合政策学部2年 吉原裕幸

環境情報学部1年 瀬下翔太

総合政策学部1年 太田知也

<参加者>

政策・メディア研究科教授 村林裕

総合政策学部教授 氷上正

環境情報学部教授 加藤文俊

環境情報学部准教授 脇田玲

SFC研究所上級研究員(訪問) 石川智也

政策・メディア研究科修士課程1年 石川由美子

他に、学生・一般参加者 約50名

### 3. 進行

< 17:00-18:00 > :

問題提起：プレゼンテーション

記者クラブ問題、小沢一郎関連報道の問題 - 堀茂樹

ドキュメンタリー映画『A』『A2』から - 学生

『ザ・コーヴ』上映中止問題 - 学生

ウェブ・メディアの可能性と陥穽 - 学生

< 18:00-19:30 >

パネルディスカッション

堀の司会で、上記パネリストが公開討議を行った。

< 19:30-20:00 >

パネリストと会場との間で質疑応答を行った。

### 4. 意義および成果

近年の日本において、ホーリズム（有機的全体論）の社会から個人を単位とするインディデュアリズムの社会への移行が顕著であるにもかかわらず、一般に日本人は今日もなお、「世間」を住み処とし、「世間」の圧力の下で、「世間」に多かれ少なかれ怯えながら生きているように見える。

今回のシンポジウムを通して、現代日本において「世間」とは社会組織の実態であるよりも、むしろ政府閣僚や芸能人等の記者会見場をしばしば独占し（省庁においては記者クラブという形で）、そこからメッセージやイメージを加工して全国に発信する大手メディアが、自らの立場を担保するものとして半ば人工的に作り上げる幻影ではないのかという見方が強く示唆された。

しかし、たとえフィクションであっても、「世間」の圧力はリアルで、まるで倫理的規範の代替物でもあるかのように人間の自由の前に立ちはだかる。出る杭に対して「遠慮」を強い、「空気を読む」ように促し、「謝罪」を求め、「自粛」を推奨する。迎合的でない行動を抑止するだけではなく、思考停止の壁となる。

「世間」を背負うメディア、あるいは今日的な「世間」そのものであるメディアは、特定の人物を集中豪雨のようにバッシングし、集団的自律としての民主主義を機能不全に陥らせることさえある。今回のシンポジウムでも、1995年以降の「オウム報道」、ここ1～2年の西松事件、今年の陸山会をめぐる政治資金規正法違反事件など一連の「小沢報道」、6月以降の映画『ザ・コーヴ』上映中止騒動などが回顧され、討議の対象となった。更に、戦後報道史のなかでも特筆されるべきエポックメイキングな事例である「ロス疑惑報道」や「核密約報道」、「イラク人質バッシング報道」なども、会場に詰めかけた参加者らによって取り上げられた。

こうして、マスメディアを現代日本において「世間」を成すものと見ることによって、普及を求められているメディアリテラシーに新たな次元を付け加えることができた。また、田島泰彦教授を中心に、記者クラブの設置根拠と実態、開放の動き、メディアの自主的取り組みである新聞社第三者委員会、放送界のBPOのこと、日本版FCC構想のこと、大手メディア企業の中の個と組織の問題などについて検討することで、マスメディア自体の構造的問題の解決へ向けても知見を得ることができた。

多くの課題が発見され、それらが未解決であることを痛感させられたが、我が国の現代社会文化を分析していく上で有意義なシンポジウムではあったと思う。